

# 社会委員会通信

25

2006.11.5

発行：横浜港南台教会 社会委員会

〒234-0054

横浜市港南区港南台 7-8-29

Tel : 045-833-5323 Fax : 045-833-6616

10月1日、世界聖餐日・世界宣教の日の午後、宮良幸宏氏をお招きして「沖縄から平和を考える」をテーマに、沖縄での戦争体験のお話を伺いました。

宮良氏は沖縄・石垣島出身で、元高校教師、「港南台9条の会」の世話人をしてつ、ご自身の無人島での壮絶な戦争体験の語り部をされています。

沖縄地上戦のことはある程度知っていましたが、沖縄本島から400kmも離れた石垣島での疎開船の戦時遭難は、今回体験談を直接伺って初めて知りました、話さなければ歴史的な事実にならないということなのです。

短い時間でしたが、参加者から感想、戦争体験の話聞くことが出来ました。内閣が替わり、憲法・教育基本法を改正して「美しい国」をつくるのだそうです。世論調査が世論をつくっているのでは、という意見がありました。

国民の全てが戦争を知らない世代となる頃、少しずつ気づかないように世論が変わり、戦争をしてもよいのだ、周囲の言う通りにすればよいのだ、戦争に反対をするなんてもってのほか、という国になってしまうのではと案じています。弱い者に犠牲を強いるような社会にしないように、戦争の悲惨さを次の世代へと伝えてゆかなければなりません。参加者は25名（男性11名、女性14名）でした。 (社会委員長：F.O)

## 社会委員会学習会：沖縄から平和を考える



講演要旨 港南台9条の会事務局：宮良 幸宏

はじめに

これからお話しする「尖閣列島戦時遭難事件」は、皆様に聞いていただくことにより、「そういうことがあったのか」と認知していただけます。そうすると、それが歴史的な事実になって定着しますので、私としてはいろいろなところで聞いていただき、また知っていただけますことを嬉しく思っております。

今日は私の体験を中心にお話ししたいと思

いますので、いろいろ話が飛ぶかと思いますが、よろしく願います。

NHK沖縄が昨年(2005)“戦後60年”の特集で『体験者の絵』を募集しました。それは防衛庁発表の沖縄戦、また、アメリカ側が撮った上陸作戦の記録ではなく、生き残った沖縄の体験者のナマの声です。それを残し伝えたい、そして沖縄の南部にある“平和祈念館”に保存したい、という企画がありまし

て、その応募作品が沖縄で放映されました。

『沖縄戦の絵 地上戦 命の記録』というのがそれです。ナレーション付きで私の絵 尖閣列島・魚釣島近海での B-24 による疎開船襲撃 も放映されました。最初にそのビデオを見ていただきたいと思います。(ビデオ上映：約 5 分)



### 戦場となった沖縄本島

今から事実に基づいた話をさせていただきます。レジュメに沿って話を進めたいと思います。最初に地図で“石垣島”がどのあたりにあるか、認識していただきたいと思います。TV で毎日天気予報が出ますが、沖縄地方は九州の下の方の画面に、線で小さくかこわれていますから、場所がよく分からない方もいらっしゃると思います。九州からはるかに離れ台湾に近く、南の国境に接しています。石垣島と尖閣列島 今中国と領有権や天然ガス採掘問題で衝突していますが は、地図の上ではこんなに近い距離です。

私が生まれた昭和 13 年(1938)には、もう戦争が始まっておりました。日本軍は中国に渡って侵略戦争をしていました。南の石垣島ではそんなことはよく分かりません。遠い外国で戦をしていると聞くだけで、平和な暮らしが続いておりました。私が 6 歳になった昭和 20 年(1945)に、突然あわただしく日本軍が石垣島にも駐屯し、いよいよ中国大陸から国際紛争の火種は飛び火して、太平洋が戦場になったらしい、ということが分かりました。

今ビデオでお見せしたこの事件は、昭和 20 年 7 月 3 日のことですが、同年の 3 月 30 日には、沖縄島のまわりを 55 万の米軍が取りかこみ、艦砲射撃を始めました。それから地上戦に移って、大体 10 万人の日本兵が亡くなり、巻きこまれた民間人が 15 万人亡くなっております。当時の島の人口を考えると、大変な死亡率ですね。

戦後、沖縄から石垣島へ一家全滅状態で負

傷した人たちが帰ってきたり、「ひめゆり部隊」の生き残りの人が帰ってきて教職員になったり、私のクラスにも戦災孤児が入ってきたりしたので、沖縄の地上戦の悲惨さはよく知っております。

司馬遼太郎がいろいろなところで書いていますが、彼の戦車隊が本土防衛に当たるため、中国大陸から千葉へ移動してきた時、「東京や千葉の住民が避難するために、大八車に家財道具を積んで逃げてきたら、どうしますか？」と上官に聞いたら、「ひき殺して行け！」とその上官が答えたそうです。

事ほど左様に、軍隊は戦うためにあるのであって、住民の生命や安全を守るためにあるのではない。それは軍隊の第一義的な問題ではないのです。それが実際に沖縄本島でありまして、戦車隊は住民たちを轢き殺し、住民が逃げまどう中を日本軍に殺されたり、防空壕から追い出されたり、米軍の火炎放射器で焼かれたりで、大変悲惨な目に遭いました。

沖縄本島は 6 月 30 日までには完全に占領され、一応沖縄戦は終わっております。大変な被害を受けて、質量ともに米軍の圧倒的な優位性を見せつけられて、これでは日本は多分負けるだろう、とみな思っていたのです。が、本土決戦を遅らせるため、また天皇制護持のために、沖縄はもう少し頑張れ“捨石になれ”という軍の命令で、かなり徹底して頑張ったようです。

その結果、15 万の民間人と 10 万の兵士が死んだわけです。それでも天皇を守るため「ポツダム宣言」を無視して、広島・長崎に原爆が落とされ、20~30 万の国民が死にました。それから降伏しました。61 年たった今も爆発地では原爆症で苦しんでいる方がいますね。

### 当時の石垣島

石垣島はちょっと沖縄本島から離れておりますし、当時は今のような情報公開でありませんので、軍の発表のみに限られた情報で、

神国日本がいかに孤立しているか、世界がどう動いているかまったく分かりません。「沖縄が全滅したらしい」などと、ひと言でも言えば密告され、憲兵や特高に引っ張られ、「どこからその情報が入ったのか」と拷問を受けたり、スパイとして消されたりしました。どこか北の国に似ていますね。当時はそういう世の中で、離島のわれわれのところには何の情報もなかったのですが、「沖縄はどうも怪しい」というようなことが、デマなどを通じて伝わっていました。

また、全体主義の国民教育で「皇国民たる者は、敵に降伏するよりは死ぬ」とか、鬼畜米英は子どもの肉は缶詰にして家畜の餌にしてしまう。女の子は強姦するし、成人男子は皆殺しにする、と教えられておりましたので、みな恐怖にかられておりました。

沖縄本島が占領されると、米軍は南方占領を完成させるために宮古島、石垣島と南下してくるのではないかという考えがあって、島民はパニックになったわけです。

### 海上でのB-24の襲撃



台湾は石垣島のすぐ近くです。私の母たちも明治・大正のころは植民地だった台湾に、尋常小学校卒業とともに女中奉公に出ています。ちょうどTVの『おしん』のようです。沖縄の那覇よりもずっと近いので、島の人は出稼ぎに出ていました。また戦争末期には、帝国陸軍部隊の大移動があって、何十万という兵隊が台湾に集まったようです。それで石垣では、安全な台湾に疎開しようということになりました。もちろんこれは軍命令です。

疎開出来るのは、“非戦闘員”である60歳以上の老人と婦女子です。聞こえはよいのですが、戦闘になると兵糧の問題もあるし、戦闘に足手まといになるので、こういう戦えない人たちは要らない、というのが軍としての戦術でした。

それで早く台湾に行ってほしいということで、2隻の漁船を疎開船として仕立て、疎開が始まったのです。6月30日出港し、途中、西表に1泊して台湾に向かう予定でした。これまで何回か疎開船は台湾に行っておりますし、われわれは一番近いコースで西表から与那国へ行き、そこでまた泊まってから、台北とか基隆へ行くものと思っておりました。

ところが、西表から与那国へは寄らず北の尖閣列島へ向かい、それから台湾に行くというコースを採ったのです。これも情報がありませんので、どういう考えで、しかも白昼にこのコースを採ったのか分かりません。多分1度ぐらい成功したので、このコースが安全だと思ったのかもしれませんが。なぜ2隻の船で200人ぐらいの子どもを含む疎開者を連れ、制空権も制海権も敵に握られてしまっている海上をノコノコと行ったのか、いまだに分かりません。

3日の昼過ぎ、尖閣列島の付近でB-24の襲撃を受けました。私はまだ6歳だったので正確な記憶はないのですが、姉たちの話では、敵機は障害物のない洋上で、出来るだけ船に近づいて正確に撃つたらしく、パイロットの顔も見えたそうです。機銃掃射と同時に爆弾も落としたのか、船が大分揺れたことを覚えています。

われわれ船団の1隻は機関室をやられ、木造船ですから、すぐに火を噴きながら沈んでいきました。それには老若男女90人以上乗っていたと思います。名簿はあるのですが、切羽詰って家族を連れて飛び乗った人たちが大勢いましたので、正確ではありません。その深夜の石垣港出発での雑踏の記憶はありません。台湾に帰る台湾人の家族もいましたし、朝鮮の女性たち(慰安婦?)もいたようです。戦後検証は出来ておりません。植民地の台湾人・朝鮮人たちも日本国籍でなくなったので、死者の数には入っておりません。

炎上沈没した船の90人ぐらいのうち、何

人かの兵隊や元気な老人たちが、私たちの船に泳ぎ着きました。しかし、子どもたちはほとんど死んだと思います。

私たちの船も空襲で船底に穴が開きました。私は機銃に撃たれ、今でも頭部に傷痕があります。直撃なら即死ですが、血が噴き出したぐらいでどうにか助かりました。船の中では、機銃でブスブスとやられた老人たちが、ものすごい叫び声をあげました。頭を隠していると、背中に他人の生暖かい肉片や血が、パツと振りかかってきたりしました。それはものすごい地獄のような光景でした。

敵機は何回も旋回して襲ってきました。標的となった、動けない小さな疎開船は、今やまったくの屠殺場と化してしまっただけです。61年たって、もう忘れたかと思いましたが、やはりトラウマとして、その時の有様がまだ残っております。

もうここで家族の命運が尽きた、と思ったのでしょうか。母は、家族と一緒に死のうという思いで、負い紐で子どもたち7人を縛り、船の沈むのを待ちました。沈没するのは時間の問題だ、と見たのだろうか。B-24は去りました。

我が家の子どもは当時、私が6歳で長男、妹・四女が4歳、五女が3歳、次男が1歳、姉・三女が8歳、次女が11歳、長女が12歳、と全部で7人いました。

当時は「生めよ、増やせよ」が国策で、“富国強兵”の枠組みは、子どもを将来の国の戦力として考えていましたから、7人ぐらいは当たり前前の家族構成でした。母は40歳前だった。

今も思い出しますが、母は空襲の最中に、7人の子どもたちの上に覆いかぶさって、敵の弾から、われわれをかばっていたのです。もちろんその時、母が弾丸に当たっていれば、私たちは無人島でどうなったかと思うのですけれども、身を捨てて子どもの命を守ったんですね。

不幸中の幸い、私が頭にかすり傷を受けただけで、どうにかその場は助かりました。



### 敗戦を検証する視点

戦争を体験した子どもたちは、戦後トラウマを各自でどうにか克服したようですが、人間が大量に殺される戦場の体験には、そのシーンに重なる銃火器の閃光とか、爆弾の破裂音とか、硝煙の臭いとか、死の恐怖とか、などなど、まとわりつく“嫌な記憶”があります。また、まわりで即死した人、負傷した人の顔、血まみれの死体と死臭が立ちこめた場所、負傷者の呻き声、取り残された子どもの悲しみ、死者に取りすがする身内の慟哭、などなど映画のフラッシュ・バックのように、何かのはずみで蘇ります。

60年たった去年7月、この時の記録写真が発見されました。米国立公文書館で見つかったものです。米軍機が尖閣列島の付近で2隻の漁船(疎開船)に攻撃を加え、1隻は沈没、1隻は大破したという記録写真です(レジュメ・「沖縄タイムス」2005年7月4日号参照)。

余談になりますが、私が『あほうどりのちかくで 母ちゃんの尖閣列島遭難記』を自費出版した時(1983)、読売・神奈川・沖縄の新聞に紹介されました。それで、ワシントンの国立国会図書館から、こういう資料が欲しいという注文が来ました。日本でも関係の筋から注文が来るかと思ったのですが、何も来ません。

戦争に関して、アメリカがこうしたわれわれのような小さな事件でも徹底的に検証したり、科学的に調べたりする態度は、日本とはずいぶん違うなと思いました。戦後の日本は、先の敗戦の検証を市民レベルの目線でしているのでしょうか。

言えることは、科学的なデータを無視して、メンツや精神論で戦争を始め、サイパンや沖縄の地上戦、その他、玉砕の島でもそうですが、戦線の拡大や成り行きにまかせて、泥縄

式に戦術を立て後手後手にまわっていた。要するに、長期的戦略や合理的判断に欠けていた、と言えるでしょう。そして、沖縄や中国・韓国の検証も不十分。



### 無人島・魚釣島に上陸

船は機関室をやられて航行不能になりました。海水はどんどん入ってくるし、血と散乱した食糧とが混ざって船倉は大変な悪臭でした。一昼夜、海流に乗って尖閣列島の東の方まで流されました。その間、船員たちが漁船の焼玉エンジンを少しずつ修理して直し、また台湾に行けそうだということになりました。しかし、途中定期的に哨戒機のB-24がやってくるだろうし、また空襲があるかもしれない。甲板は吹っ飛んで船倉の人々は太陽に焼かれる。うめいている負傷者や子どもたちは、24時間以上も水を飲んでいない。死者たちも足元にごろごろいる。そのような状況なので、一旦尖閣列島の魚釣島に上陸しよう、ということになりました。

魚釣島は、明治時代に古賀商会という商社が九州から来て、鰹節工場を建て、あほうどりの糞を集め、グアノ（肥料）にして輸出する商売をしていた拠点です。たまたま、かつてその工場で働いていた人がわれわれの漂流船に乗っていて、そこなら水は十分にあるということで魚釣島に向かいました。明治時代に船が入れるように作った小さな入り江（または船着場）があり、その人が水先案内で導いたのです。そして死者たちを陸へあげ、われわれは水を飲んで、重傷者に応急手当をして、幾日かしたら再出発出来るという態勢を整えました。

船には護衛役で7、8人の兵隊たちと船団長として軍曹がおりました。それから船を動かすために徴用された漁民が4、5人軍属としておりました。彼らは共同生活を始めるため、強制的に疎開者の食糧を集めました。われわれは台湾にも母や父の兄弟がいたので、

一家転住するつもりで米やいろいろな物を持っていましたが、軍曹の命令で全部供出しました。

共同生活を始めると、十分な食糧があるわけではなく、すぐになくなって「あとは自活せよ」というわけです。考えてもみてください。無人島ですよ、疎開者は乳飲み子をふくむ児童たちと老人たちの集団で、まともに自活できる成人はいないじゃないですか。

船を直して台湾へ行くはずだったのですが、いつの間にか乗ってきた疎開船が流されてしまっていたのです。軍人たちの話では、試運転中に流されたということでしたが、くわしいことは民間人などに言う必要はない、という方針だったのだと思います。船団長の過失か故意か、公式の説明もないまま、われわれは尖閣列島・魚釣島に取り残されてしまったのです。

疎開者の中のある老人は、「あの兵隊たちは、戦争はごめんだ、空襲からせっかく助かった命だ。今、前線に復帰すると、ヤバイ。この無人島で暮らしていれば、いずれ戦争も終わるだろう。船を流してしまえば、疎開者もあきらめる、と企んだのではないか。島に帰ったら、軍規違反・逃亡罪で軍法会議に訴えてやる」と陰で息巻いていました。このことは、見捨てられた疎開者側から見れば、まんざらウソでもなかったようです。

しかし、疎開者たちは、抗議すら出来なかった。敗戦後も責任は告発されていません。

### 食糧探しのなかで

軍人たちはサバイバルの技もあり、魚を釣ったり近くの島へボートで渡って海鳥を獲ったりして暮らしていたのですが、小さな子どもたちと母親だけの家族には、食べ物を得る何の手段もありません。島を歩き、食べられそうな草を採ったりしました。初めの頃、野生の豆をアク抜きもせず、知らずに食べて、中毒をおこし死んでしまった台湾人の女の子

がいました。やどかりが一番のご馳走でしたが、そんなにたくさん捕れませんから、7人の子どもたちが1匹ずつ食べると、1食にもならないのです。ある時は、死んだスズメ1羽を拾って焼き、親子8人で1摘みずつ食べました。

そういう状況の中では、人間はだんだんおかしくなります。例えば、姉たちが野生の百合根を探し当てた時、そこにも大人たちの競争者がいて、「あっちへ行け」と追い出されてしまうようなことがありました。結果は、その日1日欠食です。分け合うなんていう人間らしさは失せていきます。結局食べ物のためにみんなが“自分本位で動物みたい”になってしまったわけです。

老人や負傷した人たちは、声をかける人もなく、そのまま放っておかれましてから、動けなくなったり傷口からウジが湧いて化膿したりで、だんだん亡くなっていきます。最初のうちは戻れると思っていたのですが、何日かたつと、本当にどうしていいか分からなくなりました。

まず住む所を作らなければなりません。昔、鯉節工場があった敷地に崩れた石垣がありましたが、そこへ古竹を挿し込み、その上に乾燥したクバ（ピロー樹）の大きな葉っぱを何枚か載せ、その下にもぐり込んで、今で言うホームレスみたいな生活を始めたのです。南の方ですからかなり暑く、夜中にいっぱい蚊に刺されたりしましたが、だんだん食糧もなくなってくるとそんなこともお構いなしで、ただ死んだように寝ているだけでした。動ける人は食糧探しですが、そんなに食糧も見つかりませんでした。

そのような状況で、なかには「人肉を食ったのではないか」という噂もありましたが、私より記憶の確かな姉たちに聞いても、そんなことはなかったと言います。とにかく悲惨な状況で“人が人を食う”事例があってもおかしくない生活でした。

50日の間に、たくさんの方が亡くなりました。遺体を埋葬するにも、魚釣島は硬い岩盤ばかりで土壌がありません。死体を運ぶにも栄養失調のため体力がなく、2、3人で死者を引きずって行ってクバの葉で覆い、小石をのせ、そのままにしておく、それが墓になりました。弱い人から亡くなっていき、海岸にはそうした墓と言おうか、小塚と言おうか、それがいくつも出来て共同墓地になりました。

それでも母は、「絶対にお前たちをこんな無人島で死なすわけにはいかない。7人全員、かならずふるさとに連れて帰るから、頑張るんだよ」と言いつづけました。

栄養失調で衰えていく子らを励まし、自分自身をも励ましていたんだと思います。

母は、1度鬼より怖い軍曹の本部に単身乗りこんだことがあります。長女が夏の盛りの食糧探して、日射病と栄養失調で倒れた時、意を決して、「長女が倒れてしまった。乳飲み子が死にそうだから、あなた方が取り上げたお米のうち、いくらかでも返してください。あなた方兵隊さんたちは、いまでも米を食べているのではないですか」とかけあいましたが、軍刀を抜いた軍曹に嘲笑、罵倒されました。



#### 戦争の中で変わる人格

われわれは石垣島にも台湾にも帰れない日をかさねました。軍曹というのはだいたい実戦経験もあり、軍隊生活の知恵も豊富で、軍隊映画でも『鬼軍曹』などと呼ばれる大変威張った存在です。無気力な疎開者を集めては軍刀を抜いて、「メソメソするな！ たたっ切るぞ」と恫喝したりしたのですが、ある時、軍曹の財布がなくなるという事件が起こりました。彼はなんでもない疎開者に言いがかりをつけ、「財布を出せ！ 出せ！」と殴りつけ、毎日、日本刀を振り回して暴行しました。今で言う『虐待』です。

虐待は昔の話、と思わないでください。現

在でもあります。人権の国、正義の国、平和の国アメリカがイラク戦争で多くの事例を残しています。言い換えれば、戦争の中では、昔も今も、人格が変わってしまう。それが戦争というものでしょう。

魚釣島で日本の兵隊たちは、疎開者を集めては、「われわれ帝国軍人はお国のため、天皇のため、国体護持のために戦っているのだから、貴様たちのような民間人の食糧などを心配するために戦っているのではない」と私たち疎開者に向かって言うのです。

それが彼らの根本的な姿勢でした。今なら人権とか人道とかの考えがあって、厳しい環境でも協力体制を作り、もう少しうまくまとまったかもしれません。弱肉強食ではなく、人道主義的行動があれば死ぬ人も少なく、もっと助かったのではないかと、いろいろな考えますが、戦争とはそういうものなのです。

では今戦争すれば、どうかと言うと、私には予言は出来ません。ミサイルが飛び交う中、「民間人の皆さん、どうぞこちらへ、安全な方へ」などと言う時間はないと思います。一旦戦場となれば、兵士と非戦闘員を識別する余裕もないでしょう。武器も昔より発達して、ボタン1つで正確に命中し、大量殺戮出来ます。動くものは子どもでも射殺されます。人を殺したり、自分の足が吹っ飛んだり、同僚が無残に殺されたりすれば、人格が変わると思います。

先程の司馬遼太郎の話もありましたけれども、自国民を戦車でひき殺したりしても、良心の痛みも感じなくなるでしょう。他国で戦争すれば、尚のことです。兵隊は軍の作戦で動くものです。そうした非人間的行動で汚名を残したのが、60年前の日本軍の姿でした。今度戦争が始まれば、軍隊は60年前とは違った、人道的な行動を取るのでしょうか。どうなるでしょうね。

敗戦も知らずに救助され石垣島へ

希望を失いかけているうちに、これではいけないということで、疎開者の中にいた船大工が中心になり、みな協力して難破船の板を集めてサバニ(7、8人乗りの沖縄の小舟)を造りました。例の鬼軍曹は避暑気分で、隣の小島にボートで行ったきりで留守。軍人の風上にもおけない奴ということで仲間から除外され、軍曹に対抗する穏健なグループと疎開者たちの協力で小さな舟が出来たのです。母は10日ぐらいで出来たと言っております。

それを漕いで石垣島に向かいました。漕ぎ手は軍属の男たち、沖縄で言う海人(うみんちゅう)です。古代、沖縄の海人は黒潮に乗って土佐あたりまで出かけ、16世紀の大航海時代にはシャム国・タイ国あたりまで行ったという人たちです。この人たちが、母たちの手縫いの小さな帆を張って、2昼夜ぐらいかけて石垣島へ着いたのです。彼らにコンパスがあったかどうか分かりませんが、夜空を仰ぎながら最短距離を走ったそうです。昼間に途中何回も哨戒機に遇ったといいます。沖縄には“ハーリー”という競技があって、舟をひっくり返してまた起き上がって漕ぐ競走ですが、哨戒機が来るとサバニをひっくり返してその中に隠れて漂流船を装い、敵が去るとまた元に戻して漕ぎながら石垣島にたどり着いたのです。

魚釣島に残ったわれわれは、その人たちが石垣に着いたかどうか、心配しながら何日も過ごしていたのですが、どんどん弱っていくうちに、ある日、日の丸を付けた飛行機が飛んできました。最初、例の哨戒機だと思って隠れたのですが、落下傘で大きな包みが落とされ、乾パンや手紙が入っておりました。手紙には、「救助船が来るまで頑張れ」と書いてあり、連絡が成功したことが分かりました。

ついに救助船来る

その後2隻の救助船が来たのですが、われ



われは餓死寸前で歩くことも出来ないような状態でした。今でもドキュメンタリー・フィルムなどで難民の姿が映されますが、全くあれと同じです。食べ物がなくなると、すぐ表に現れます。吹き出物が出たり皮膚病になったり、肌がかさかさになります。口内炎で歯茎が腫れたり、歯槽膿漏で歯が欠けます。慢性下痢で立てなくなり、お腹だけが大きく膨れます。髪の毛は枯葉のようにパラパラ抜け落ちます。

われわれは6月30日に疎開船に乗り、救助されるまで約50日もたっていたのです。健康な大人でも山に入って遭難し、翌日死ぬ人もいますし、海で何日も漂流して助かる人もいます。しかし、子どもたちが50日も栄養不良の状態が続くと、本当に悲惨なことになります。成長期の子どもが栄養障害に遭うと、心身ともに大きなダメージを被ります。

2隻の救助船が入って来た未明、われわれは住んでいた小屋の屋根を持って来て、入り江で燃やしてかがり火にしました。その救援船で来てくれた人たちから見ると、無人島のわれわれは、異様に見えたそうです。無表情で目はくぼみ髪はボサボサ、50日風呂にも入らず、ボロボロな服装で、骨と皮で動けないため座ったまま。「早くこっちに来て」と手招きする姿が、まるで地獄草紙の絵の中の“餓鬼”のようだったと言います。

本当にそうだったろうと思います。そのように変わり果てた姿になっても、幸いうちの家族は一人も死にませんでした。そして石垣島に着いたのが8月19日でしたが、戦争に負けたことも知らず、15日の玉音放送も知らずにおりました。

この戦争って、いったい何だったのだろう。われわれは戦争を逃れるため出て行ったのに、かえってこんな事件に巻き込まれ、海上でも無人島でも多くの犠牲者を出し、餓死寸前の状態で帰って来たわけです。

## 弟妹の死

弟と妹は1歳と3歳で、食べ物もなく、とくに1歳の子は母乳が出なくて、もちろん離乳食もなく、かわいそうでした。女の方はご存じだと思いますが、母親は、大体自分の体が耐えられなくなると、乳は出ません。母体維持の自然の摂理ですね。だから1歳の弟は、出もしない母の乳に懸命にかじりついて乳首を噛んだらしく、その痛みがいつまでも母の記憶に残っていました。後日ため息まじりに、「本当に痛かったけれど、私の痛みよりも、もの言えぬ1歳の子が、あんな環境で、どんな気持ちで乳房にしがみついていたか、考えるとたまらない」と悲痛な思いを語っておりました。

帰って来て間もなく3歳の妹が先に亡くなり、1歳の弟のほうに母に庇護されていたせいか、あとで亡くなりました。石垣島の火葬場は戦後すぐで開いていなくて、小さな箱に亡骸を入れ、野辺の送りをしました。

沖縄には“亀の甲墓”という大きな先祖代々の墓があります。その庭が広いので、そこに2人を土葬しました。それから、日本本土にも昔はあったらしいのですが、沖縄では“洗骨”の風習があります。土葬した後、数年たって骨を洗って先祖の骨と一緒に厨子甕に納めるのですが、2人の骨も洗骨され、今は墓に納まっております。

洗骨の時、父は泣きましたね。「戦争で苦労したせいか、骨が細くもろいね」と。

われわれもほとんど死んだようになっておりましたから、弟と妹が死んだときの状況はよく分かりません。その時のことを母にいろいろ聞くのですが、なかなか話しませんし、話せません。録音していてもそこで沈黙してしまって、ただ録音機が回っているだけでした。可愛い盛りの子を戦争の中で連れまわし、医者の手当ても満足に受けさせず、餓死状態で死なせたことが、深く心に残っていたと思います。



ページを繰ってください。レジュメ5は「神奈川新聞」への投稿です。弟と妹が亡くなって洗骨した後、6年生の姉が学校から妹の「小学校就学通知」を持って来ました。戦後のどさくさで、石垣町の戸籍係がうまく処理していなかったのでしょうか。また私が6年生になった時にも、今度は弟の「就学通知」を受け取りました。6年生の私は空襲から始まる無人島での漂流生活や、弟の戦病死の悲しみがうまく説明出来ず、先生の前でただ涙が流れるばかりでした。

弟妹の就学通知を2度も受け取った母は、涙ながらに、「生きていればそんな歳になるのね。ひもじい思いをして亡くなった2人の子どもたちが、天国に行けず、思い出させるように、また戻って来たような気がする」と言ったのです。

「神奈川新聞」の「自由の声」に載っているのは、そのことを書いたものです。亡くなってしまえば戦争はおしまいではなくて、生き残っている人たちも、いろいろな思いや悲しみをずっと引きずっているのです。ことに母には、何十年たっても忘れられずに残っているのだと思います。その一文に結語として書きましたが、「孫たちに『また、戦争になるの』と問われるとき、『無意味で悲惨な戦争は2度とないよ』と確信をもって答えたい」とあります。

母の記憶は確かですので、私は石垣に帰るたびに話を聞いて録音するようにしました。ところが同じことを繰り返したり、また全然触れない、語らないところもあります。私はずっと知りたいと思っていても、決して話さなかったのが妹と弟の死です。そここのころに来ると口をつぐんで話せなくなります。そのうちにやっと話してくれたのです。弟も妹も栄養失調で衰弱しているところ、肺炎を併発したようです。急に高熱が出て、2人とも同じような状況で夜中に亡くなっています。

その代わりと言うか、その2人を犠牲にし

てと言おうか、われわれはどうか今日まで生き残ることが出来ました。

戦争とは兵隊が武器を持って戦うだけではない。その隣に何も知らない子どもたちが、悲惨な生活を強いられていたんだ。戦争に巻き込まれて、幼い者たちが真っ先に命を落としていたんだ、ということ覚えておいていただきたいと思います。



#### 戦争の愚かさと戦後の沖縄

話は元に戻りますが、レジュメにあるように、この事件は、私が自費出版をした1983年と、近代文藝社から出版した1995年に、再度、神奈川や沖縄の新聞などが取り上げてくれました。その際、いくつもインタビューに応じたので、新聞社によって取り上げるポイントは違いますが、「戦争の愚かさを知らせる」という立場で書かれている記事がほとんどです。

戦時には、情報を統制して一つにしなければ、戦争ができません。多様な思想とか良心や信教の自由などを認めていたのでは、とても国民一丸となって戦えません。どこか北の国と同じように、將軍様万歳。何事も將軍様の仰せのとおり、異を唱える者は非国民だ。お国のために死ぬことが名誉、それが正義だと信じていないと、敵を殺せませんね。

私が小学1年生であった時代は軍部独裁で、思想は『忠君愛国』一色で統一され、世界には多様な価値観があることも気付きませんでした。情報は政府の都合の良い発表のみ。われわれは何も真実を知らされない『井の中の蛙』で、その結果が、小さな子どもから戦争の惨禍に巻き込まれていったのです。

国が亡びた後、沖縄に対して国がどのように補償してくれたか、どういうケアをしてくれたかということになると、何もありません。戦後、あっという間にアメリカ軍の統治下に丸投げされました。同じ占領下といっても、本土とは違います。本土では昭和天皇も吉田

茂もいて、いろいろ戦後処理交渉があったわけです。

沖縄ではそうはいきません。島民たちが収容所に入っているうちに、ブルドーザーで住宅地を地ならしして、そこを飛行場にする。島民が収容所から出て来たら、住む所がないから基地の周りに家が建つ、といった感じです。同じ占領下と言っても違うのです。占領軍は軍事優先です。民政や島民の人権は、長いことないがしろにされました。

現在、本土では軍用基地の25%が私有地で、あとは国有地です。ところが沖縄の軍用基地の75%が私有地です。そのため都市計画が進まない。長期的な視野で産業育成が出来ない。失業率は全国一。米軍兵士による凶悪犯罪が頻発。全然違います。それが30年も続いて、ようやく本土復帰が出来たわけです。

われわれは敗戦で、「戦争は引き合わない。武力では国際紛争はなんら解決出来ない」ということを、多くの犠牲を払って学びました。だから沖縄が本土復帰をすることは、平和主義の日本国憲法に戻れる、戦争放棄した「9条」に戻れると喜んでいたので。が、現実には、それからまた30年、結局60年間、戦争の重圧は増しつづけたのです。アメリカの行なった朝鮮戦争・ベトナム戦争・湾岸戦争・イラク戦争・その他の紛争と、沖縄から兵士と武器弾薬を戦地に送りつづけ、傷ついた帰還兵を迎えつづけました。戦争の緊張と恐怖がいつも身近にあるのです。現在は極東一の膨大な基地のため、テロの標的になっています。

日本本土の1%にも満たない、僅か0.6%の小さな沖縄本島に、日本全土の基地の75%が集中しているのです。どんなに大変な所か考えてほしいと思います。



### 私の学生時代と上京

昭和30年(1955)、私は琉球大学に入りました。そのころの琉球大学は沖縄県立ではあ

りません。琉球政府立だったのです。その後、国立になっておりますが、私は入った時にショックを受けました。石垣島にはまだ山もあり、緑もありました。ところがこの沖縄本島に渡った時、戦後10年たっていましたが、まだ、地上戦の跡がなまなましく残っていました。今の首里城のある所が琉球大学でしたが、その丘のまわりは艦砲射撃と機関砲、火炎放射器などで、丘は平らにされ、樹木が1本も残っていないのです。まったくの焼け野原です。「鉄の暴風」とはこのことでした。

那覇市の奇跡の1マイルと呼ばれた「国際通り」はありましたが、芝居の書き割りみたいなもので、裏へ回ればお粗末なものでした。私は本当に『国敗れて山河なし』だと思いました。

大学図書館にある写真集に、鎌倉芳太郎が戦前に撮影した沖縄の文化財や風景が載っていました。その全部、首里城はじめ琉球王国の国宝級の文化遺産がことごとく灰燼に帰したのです。首里の町からちょっと軍用道路をバスで行くと、今度は鉄条網で囲まれた基地が延々と続いています。フェンスの向こうには広い芝生と白い建物が並んでいます。紛れもない植民地です。また、姉がタイピストとして働いていた基地内を案内してくれました。そこには、アメリカ、1950年代の豊かな物質文明があったのです。その時期に、基地拡張のための“土地強制収用”があり、米兵による少女強姦致死事件がおこり、スクラップ拾いの婦人が射殺されたりする事件がありました。私は石垣島から出てきて、本当に愕然としました。こんな殺伐とした格差社会で英文学を勉強することは出来ないのではないかと思います。

1年次で大学を中退します。そして単独本土復帰です。そのころ持っていた“パスポート”は、皆さんがお持ちのパスポートとは違います。普通のパスポートはその国の総理大臣か外務大臣が、『このパスポートの所持者は、

この国の国民であるから、貴国で生命や安全を保証してほしい』、ということが書いてあります。ところが、われわれが持っていた戦後の“渡航証明書”は、琉球軍政府高等弁務長官が発行した、『沖縄島民であることを証明する』だけのものです。ですから、どこかで遭難した場合、台湾へ入ろうが、中国へ流されようが、ベトナムへ漂着しようが、身分を保証してくれる何の役にも立ちません。どこの国民でもないのです。日本国民と書いてありませんし、アメリカ人とも書いてないのですから。



沖縄戦の事実を風化させないために

レジュメ4ページの下に、最近亡くなられた吉村昭さんからの手紙があります。この方はNHK「ルポルタージュにつぼん『尖閣列島秘話』」(1980?)でわれわれの事件取材のために、石垣島に行っておられます。尖閣列島・魚釣島には、防衛庁やその他の省のいろいろ規制があって渡っていませんが、空から海から、島の全貌を捉えています。あの悪夢の中で見たような冷酷な魚釣島は、映像の中では、南海に浮かぶ“テーマ・パーク”のように、ごんまりと映っておりました。

時代が変わったのです。戦争中、漂着して飢餓地獄で見た風景と、平和な飽食の時代に心地よいソファーに座って見たテレビの風景とは、同じはずがありません。それで私が自分の本を贈りましたら、丁寧な返事をいただき、随分正直な方だと感じました。地味な方で嘘はおっしゃらないと思いますが、無名な拙著を褒めていただいたのが大変励みになり、今もその手紙は大切に持っております。

その吉村さんが取材したのは、われわれの事件と言っても、ご自分の手紙にも書かれているように表面的なことで、本当の姿はよく分かっていなかったようです。それで、われわれのような家族が遭った体験には大変驚かれました。

戦後60年たち、「琉球新報」が戦争の風化を止めようと、大変力を入れて沖縄戦をまとめております。地上戦はもちろん、ひめゆり部隊や健児部隊や対馬丸事件などの悲惨な状況は知られていますが、県内でも離島のわれわれの事件はあまり知られていません。レジュメの2ページはそれを取り上げてくれた記事で、私もインタビューに応えました。その写真の1枚は2、3年前にわれわれ遺族たちが石垣島に建てた慰霊碑です。

それからもう一文、最近7月のものですが、それでも、「沖縄慰霊の日」に当たって、朝日新聞に「沖縄戦の悲劇を忘れずに、戦後の進路をしっかりと考えよう」という社説が載りました。ところが現実には、今の風潮として「早く戦争をやれる国になる」とか、「戦争を始める前に相手を叩け」とか、戦争の悲劇を忘れたように、大変物騒な世の中になりつつあるんじゃないか、と私は心配しております。6月29日の『沖縄戦の事実 風化させるな』は、そういう思いで書いたものです。

以前、修学旅行で「ひめゆり部隊」の語り部の話を聞いた高校生が、「つまらない」「退屈だ」と言ったとかで、みんなショックを受けました。伝える側にも問題はあると思います。今時の子らには、説教臭さを拭い去り、面白く伝えたり、うまく伝えることも重要でしょう。ですが、それよりも、若者がどうやって過去の歴史を自分のこととして受け止め、共感し、共通の歴史体験にして次の世界のことを考えるかということが、将来を背負う若者にとって、さらに重要だと私は思っております。体験者もだんだん少なくなってきましたし、いなくなってしまう後でも、歴史を共通のこと、過去から現在につながる自分のこととして考え、未来に手渡してほしいと思って投稿しました。



美しい国家とは

先の「慰霊碑」の話で、遺族たちが建てた、

と少し遺族たちにこだわりましたが、戦争とは、国家元首の宣戦布告で始める一大国家行事ですよ。戦争が終わったら、国家の仕事として戦後処理くらい国でやってくださいよ。それに遺族と言っても、同じこの事件で亡くなった兵隊の遺族は年金をもらっています。同じ船で隣にいて死んだ島民の遺族は、何もありません。欲しくて言ってるのではありません。

妹も弟も戦病死ということで、慰霊碑に名前が刻まれております。写真の後ろの方に小さく見えるのがそれです。われわれもお参りするたびに、今生きていれば61歳と63歳になっているはずの弟妹の、小さかったあの頃を思っては手を合わせております。

もう1枚には、戦後元気を回復した一家が、我が家の前でとった写真が載っています。両親の間にいる子が戦後生まれで、現在100歳の母と一緒に石垣島で暮らしている三男です。

次は、レジュメにある『私と国家』です。先ほど話したように、私はあまりにもひどい沖縄本島から東京へ出て来ました。日本入国に際しては、例の「渡航証明書」を東京税関で査証してもらい、検疫所で伝染病接種の検査してもらい許可されました。そして叔父を頼って中野に行きました。

戦後10年余たったのですが、そこは沖縄の現状とはまるきり違っていました。サンフランシスコ平和条約の調印で沖縄を人質にし、自分たちは独立して平和国家になった本土でした。戦後復興だ、経済発展だ、という明るい雰囲気でした。そんな母国は、「沖縄とはまったく違う国だなあ！」と思うほどの落差でした。

今でもそういう政治・経済・教育面での格差はありまして、“これは差別ではないか”と国連の機関で論文を書いている人もいます。みなさんは観光旅行をただけで、よくご存じないかもしれませんが。

5ページには今の話を新聞に投稿した一文

が載っております。朝日新聞で「私と国家」というシリーズがあって、「この国をどう思うか」という特集でした。「美しい国日本」というのは大変結構な話ですが、沖縄から見た時に、本当に美しい国とは見えません。私が経験した戦中の醜い日本兵や戦争責任を取らない日本人と戦後の民主主義の日本人との違い、日本政府が60年たっても沖縄に基地をそのまま押しつけている現状などを考えると、自分の中にある母国日本への愛と、マイノリティーは何か差別されているんじゃないかという怒りと、両方あり、愛憎入り交ざった思いになります。

それから同じ5ページの「沖縄戦」のところに書いてありますが、私の今まで述べた戦争体験を新聞に投稿したら、これは『朝日文庫』に収録されました。もちろん、いろいろな戦場体験の中の一つとして入っているわけですが、その他の体験も読んでいただきたいと思います。

それから、先ほどビデオで見たものは、「沖縄戦の絵」というテーマでNHK沖縄が放映したあと編集し、NHK出版から出されたものですが、後付を見ると、NHK出版は他にも『広島記憶』とか『長崎の祈り』というように、被爆体験者の絵をまとめております。

思うに、戦争中大本営発表を事実の裏づけも取らずに、「戦果が挙げた！」と事実でないこと(=嘘)を流したのが、NHKの前身だったという反省からでしょうか。そのため国民をミスリードし、国を滅ぼしました。最近のNHKは広島や長崎の体験をまとめたり、沖縄の基地問題をタブー視せずに放送したりしております。

マスコミのスタンスも、過去の反省から、「国を愛する」ことが必ずしも世論に同調することや、時の“政治機構”に賛同することではないと唱えています。ついこの前まで、“挙国一致政策”に賛成しなかった人々を『非国民』といって、新聞も一緒になってみなで

弾圧し抹殺しましたが、戦後になって彼らが本物の愛国者であったことを知りました。そういう視点から、今『反日分子』だとか、『売国奴』とか罵られている少数派の人々の意見にも、耳を傾けたいと思います。

この画集には、戦場となった凄惨さや、日本軍の住民虐殺や、集団自決を強制された話など、沖縄住民の体験が載っております。目を背けたくなく、知らないままで済ませたい事実かもしれません。だけど、本の帯の「私たちは事実を知る責任がある」という言葉を、私は大変良い言葉だと思っております。「私たちはそんなことは知らない。知りたくない」のではなく、「知る責任がある」のです。ぜひ知ってほしいし、平和に生きるためにはどうしたらいいか、ということを考えてほしいのです。



終わりに

今、母は100歳で認知症もあり、ほとんど昔の話もしないし、覚えていません。私のこの本にあるように、一応家族全員元気になりましたが、私は当時の後遺症、すなわち発育期に受けたひどいダメージのためか、虚弱体質でした。生き残った四女の妹も戦後亡くなり、結局、弟妹3人が下から順に亡くなっております。戦争との因縁を考えさせられます。

さて、元気になった写真を撮った頃、かかりつけの医者のところへ、母と子ども5人一緒にお礼に行きました。そうしたら老齡の医者が、「君たちは悲惨な戦争を経験したけれど、もう君たちの生きている間に、2度と戦争はないだろう。だから君たちは100歳まで生きますよ」と言ったのです。その時母がポツツと言いました。「本当に戦争さえなかったら、邦雄も洋子も100歳まで生きられたかもしれないのに」と。石垣島で2人とも小さな命を全うし、その間に、成人して結婚し家庭を築いて、新しい命を育み、平凡な生活を送ったかもしれない。けれど、早世した2人には、

すばらしく大きな可能性が秘められていたかもしれません。命の大切さを思い、それを失った悔しさは今でも残っております。

これから憲法が改定されたり、教育基本法が改正されたりして、日本はどのような方向に進むか分かりません。強い国になるには、相手が原爆を1つ持てば、こちらは10個原爆を持たなければ抑止力になりません。相手が水爆を10個持てば、こちらは水爆を100個です。大量殺戮兵器も、研究費を注ぎこんで開発しなければなりません。こんなに南北に長い島国ですから防衛力としては、自衛隊だけでは足りませんから、徴兵制をしいて“国民皆兵制”にしなければ、仮想敵国に侮られます。たえず新式の軍備を整えるためには、軍事予算も大幅に増やさなければいけません。増税も止む無しでしょう。世界の世論に耳を貸すのは、弱腰外交です。毅然とした態度でわが道を行きましょう。国際貢献になるなら、海外派兵もしましょう。そうなると戦死者が増え、靖国神社の英霊が増えますね。

それで済めばいい方かも知れませんよ。お互いに核兵器の報復合戦をやれば、地球は汚染され、人類を全滅させるでしょう。それでも、『過ちを再び繰り返します』か。

おやおや、いつのまにか、もと来た道に似てきましたね。本当に、こんな方向に日本が動いていいんですか。

私は、「日本がまた戦争が出来る国になりましたよ」と認知症の母には伝えたくありません。また尖閣列島で餓死した人たちや、海で死んだ人たちに、「また戦争をするかもしれないよ」と報告したくはありません。戦争になれば、賛成でも反対でも、とにかく巻き込まれて、先に死ぬのは若い人たちです。そういう国になってはいけないと思い、自分少しでも出来ることとして、これからも体験を伝えていきたいと思っております。

## 宮良幸宏氏のプロフィール

1938年、沖縄県八重山郡石垣町に生まれる。

横浜市立高等学校英語科教員を経て、神奈川県立高等学校英語科教員で定年退職。

## 宮良幸宏氏の著作・掲載誌・参考資料

『あほうどりのちかくで 母ちゃんの尖閣列島遭難記』1995年 近代文藝社

掲載誌：『60歳のラブレター』2002年 NHK出版

〃：『戦場体験「声」が語り継ぐ昭和』2005年 朝日新聞社編

〃：『沖縄戦の絵 地上戦 命の記録』2006年 NHK出版

参考資料：1.『学習会のレジュメ6枚つづり』

2.『沖縄戦新聞 沖縄戦60年』2005年 琉球新報社

<2005年度 新聞協会賞受賞>

<第5回「石橋湛山記念 早稲田ジャーナリズム大賞」受賞

## 参考図書

『27度線の南から』 沖縄キリスト者の証言

日本基督教団沖縄教区編 日本基督教団出版局 2,000円

『小さな島からの大きな問い』 キリストとオキナワにこだわる一牧師の平和論

平良修著 新教出版社 2,000円

『沖縄 平和の礎』 大田昌秀著 岩波新書 650円

『戦さ場と廃墟の中から』 戦中・戦後の沖縄に生きた人々

日本キリスト教団沖縄教区編集・発行 2,000円

『OKINAWA Field Trip 2005』沖縄フィールドトリップ報告書

国際基督教大学平和研究所



## 社会委員会からのお知らせ

12月の社会委員会の活動は例年通り、寿町の支援を行います。毛布・防寒着・下着類・米・調味料・石鹸・タオル等の献品をお願いします。12月17日（第3主日）までに教会にお持ち下さい。また、献品を寿町まで搬送するドライバーも募集しています。ご協力をよろしくお願いいたします。